



挨拶





閉校のご挨拶

校長
笠松 勝美

本校は、1967年(昭和42年)、かつらぎ町に橋本・伊都・笠田3高校の定時制課程を統合し定時制(普通科)高校として創立し、翌年には通信制課程(普通科・衛生看護科)が併設されました。

開校当時は、当地方に神戸生糸和歌山工場や県立和歌山医科大学附属病院紀北分院等に勤務する青少年が多く、働きながら学ぶ勤労青少年の育成を目指した定時制・通信制独立高校としてスタートしました。定時制課程は、夜間部・昼間部・昼夜間部の三部制、通信制課程は、卒業を目的とする規制コース、卒業を目的としない(生涯学習)自由コースを設けました。「いつでも、どこでも・・・」をキャッチフレーズに広く勤労青少年を受け入れ、当時の定時制・通信制高校としては、授業形態も画期的なものでした。

当時の生徒は、昼働き、夜学ぶ夜間生徒が大半でした。しかし、1974年(昭和49年)には高校への進学率が90%を超え、高校教育が準義務教育化し、中卒者の多くは全日制の高校に進学するようになりました。中学校を卒業して、働きながら学ぶ勤労青少年が激減しました。そして、時代とともに入学生も様変わりし、定時制・通信制高校の役割も変化を迫られました。そこで、変化の激しい社会のニーズに適切に対応するために、1992年度(平成4年度)入学生から単位制・三修制、1995年度(平成7年度)から二学期制を導入し、選択教科・科目や特別講座をさ

らに充実させる履修形態の多様化・弾力化を図りました。通信制課程では、入学機会の拡充(年3回の転入学、年2回の入学・編入学)、週3日(日曜、火曜、木曜)のスクーリングと試験の実施、学校設定科目(学び直し、基礎学力の補充、学力向上などの科目)の充実等も行い、柔軟なシステムによる教育を推進してきました。

さらに、地域に開かれた学校として、地域の方々に学習の機会を提供する各種講座を開設し、充実発展に努めて参りました。

しかし、2013年(平成25年)に和歌山県立高等学校再編整備第2期(後期)実施プログラムが発表され、本校は2018年(平成30年)3月末をもって、51年間の歴史に幕を閉じることになりました。新しい理念を持った定時制・通信制高校「伊都中央高等学校」に生まれ変わります。本校の歴史と良き伝統を受け継ぎ、さらなる発展を遂げるものと確信しています。

最後になりましたが、卒業生の皆様のさらなるご活躍をお祈りするとともに、これまで長きにわたりご支援をいただいた県教育委員会、歴代校長、関係教職員、地域の皆様、ETA(産学振興連絡協議会)、PTA振興会、同窓会等すべての皆様方に深く敬意を表し、心から感謝申し上げます。閉校の挨拶といたします。



紀の川高校閉校に寄せて

PTA 振興会会長
中谷 保

紀の川高等学校が閉校するにあたり、PTA 振興会を代表してごあいさつを申し上げます。

紀の川高校は、教育の機会均等を理念とした新しい教育制度に基づき、働きながら学ぶ人たちのために、1967年(昭和42年)に定時制高校として創立され、1968年(昭和43年)には通信制課程が設立されました。勤労青少年の育成のため、保護者の連携と地域の共感を得る中、誠実な人柄と豊富な経験による的確な判断力とたゆまぬ実践力を発揮し、紀の川高校の発展と地域の振興のために奔走・活躍した前会長北田通氏の意味を受け継ぎ、2代目として平成21年度より会長を仰せつかりました。

定時制通信制の独立校として開校し、地域とともに歩んできた本校から3100人余りの有為な人材が世に送り出されました。地域の皆様の長年にわたる暖かいご支援の賜であり、歴任教職員、PTA 振興会、ETA、同窓会、関係者の皆様のご尽力のおかげです。深く感謝いたします。

過疎化や少子高齢化等多くの課題を抱えた昨今、生徒数減少などによる高等学校の再編整備計画により51年の校史を閉じることになった紀の川高校。同窓生の皆様の寂しさ、地域の皆様の愛惜は深いものと拝察いたします。

PTA活動を振り返ると、2012年(平成24年)から始めた2つの大きな事業が心に残っています。一つは、生徒会が主催する「紀の川高校冬

のクリーン作戦」です。「日頃お世話になっている地域に何か役立つ活動をしよう」という生徒会の呼びかけに、定時制・通信制生徒、地域の住民や企業の方々、教職員、保護者が合同で寒い冬の休日に清掃活動に励みました。地域とのつながりを感じ、生徒が大人と関わる良い機会となり、この活動の中で生徒たちの糧となるものが随所にみられました。二つめは夏の教育講演会で、学校とPTA 振興会が一体となり、子どもたちを育てていくために開催しました。近年、社会状況や定通教育が担う役割が変化し、学校では、私たちが生徒であった頃に比べ、人間関係や学習活動に「困り感」をもった生徒が増えています。子ども一人ひとりにとって居場所のある学校づくりや子ども理解の視点や方法等について学びあう大変貴重で実り多い研修会でした。

結びになりましたが、紀の川高校が閉校になっても、今日までの輝かしい歴史・培われた伝統は絶えることなく受け継がれていくものと確信しております。紀の川高校の卒業生の皆様が、自ら選んだ道で日々精励され、たとえ試練が立ちだかっても、学んだ知識と教えを生かして克服し、目標に向かって邁進することを願っています。



閉校に寄せて

同窓会長(定時制課程第10期生)

上田 一男

私は母校に昭和51年に入学しました。当時は昼働きながら、夜学ぶ勤労学生が在校生の大半でした。私も昼働き、夜学ぶ定時制高校生活を送りました。当時は、普通科定時制課程、衛生看護科通信制課程、普通科通信制課程があり、中学校卒業生は「金の卵」と言われ、かつらぎ町の神戸生糸株式会社や和歌山県立医科大学附属病院紀北分院や橋本市の国保橋本市民病院等で働きながら学ぶ若者が多数いて、学習やクラブ活動に情熱を燃やし、充実した高校生活を送っていました。その中で、特に衛生看護科生徒は上級の看護資格を取得するために進学する者も多数いました。

私は、昭和61年に当時の鶴谷校長先生から、母校が創立20周年式典を開催するから、同窓会長を引き受けてくれないかと言われ、当時卒業後もよく学校に行っていたメンバーを中心に同窓会役員が決定されました。そのメンバーは11名で、普通科定時制7名、普通科通信制2名、衛生看護科2名でした。私たちが初めての同窓会役員で、それまでは役員がいませんでした。

私は、校長先生から最初は2年間だけという約束で引き受けたのが始まりで、後任の会長が見つからないまま現在まで31年間会長を務めさせていただきました。この間同窓会長としての主な活動は、創立20周年記念式典を開催したり、学校行事(入学式・卒業式等)や毎年開催されている和歌山県高等学校同窓会連絡協議会総会に代表として参加することでした。

この31年間で、母校は時代の流れとともに変

化し、勤労青少年に学習の機会を提供する場から不登校経験者や特別な支援を必要とする生徒が多く入学してくる高校へと様変わりしてきました。

平成24年に、中学生人口の減少予測により、伊都地方の高校の統廃合問題(伊都高等学校と紀の川高等学校の閉校)が、和歌山県教育委員会より出されていると校長先生から聞き、母校の存続のため、校長先生、PTAの皆さん、さらに他校の同窓会長とも連携しながら協議を重ねましたが、平成25年に和歌山県立高等学校再編整備第2期(後期)実施プログラムが発表され、平成27年度に母校の生徒募集が停止され、平成30年3月末を持って閉校となることになりました。

卒業生としては、母校がなくなるのは寂しい限りですが、新たな定時制・通信制高校として生まれた伊都中央高等学校に、母校の定時制・通信制教育の源流が生かされることを期待してやみません。

閉校に際し、伊都中央高等学校に多くの母校の通信制課程の生徒が転学しますので、閉校後も微力ではありますが同窓会として見守っていきたくて考えています。

最後に、同窓生のますますのご活躍を祈念するとともに、母校の設立から現在まで共に歩んでこられた同窓生はもちろん、母校の発展のためにご尽力いただいた歴代の校長先生をはじめ教職員、PTA等すべての方々に感謝を申し上げます。閉校の挨拶といたします。



紀の川高校とともに歩んだETA

ETA会長
中谷 英昭

紀の川高等学校が閉校するにあたり、産学振興連絡協議会（Employer and Teacher Association）を代表いたしまして、紀の川高校とともに歩んだ50年余りの活動を振り返り、ごあいさつ申し上げます。

本会は、紀の川高校が開校された半年後の昭和42年10月に発足して以来、地域の産業社会における定通教育の向上や生涯学習の推進を図るとともに、地域の発展に貢献する有為な人材育成のために活動を続けてまいりました。

本会の発足当初は、働きながら学ぶ生徒たちに、より良い学習環境を整えるため、学校と雇用主が一体となって努力してまいりました。

しかしながら、近年の産業構造や雇用形態の変化により、生徒を取り巻く社会環境が大きく変わるとともに、不登校経験者や全日制高校中途退学者の増加など、かつて勤労青年が通っていた頃とは定時制通信制高校における教育も大きく様変わりしてきました。こうした状況の中で、働くことを学び、働く力を身につけ、勤労青少年として自立させていくための活動にも取り組んでまいりました。

生徒にとって、地域社会や学校は、多様な人間関係を通じて社会人としての基礎となる力を身につける重要な場です。地域と一体となった社会体験活動などの取組や学校におけるキャリア教育、課外活動などを通じて生徒の職業意識を育むための職場見学や職場体験などに、本会

も産業振興の立場から支援してまいりました。また、次代を担う生徒が、クラブ活動を通じて豊かな心を育み、能力を高め、いきいきと活躍できるよう、本会から公式試合用のユニフォームなどを提供してまいりました。さらに、図書館へは、毎年、書籍購入費の補助をすることで、夏休み中に生徒と図書担当教員が大阪の大型書店へ出向き選本を行うことができました。蔵書も充実し、図書館を利用する生徒も年々増えました。

このように、紀の川高校の教育活動の充実の一助となりえたことは、本会にとって大きな喜びとするところです。

最後になりましたが、平成27年度末に生徒会が中心となり、紀の川高校からETAに対し、手作り和紙で作った感謝状をいただいたことは、大変貴重な思い出です。

生徒の皆さんが、紀の川高校で身につけたこれからの社会を生き抜く力を発揮し、地域に貢献することを祈念して閉校へのあいさつとさせていただきます。



和歌山県立紀の川高等学校 閉校にあたって

和歌山県知事
仁坂 吉伸

和歌山県立紀の川高等学校は、平成30年3月31日をもって伝統ある歴史に幕を下ろすこととなりました。

同校は、昭和42年4月に定時制課程普通科高等学校として開校し、翌昭和43年4月に通信制課程普通科、さらに同年7月に衛生看護科を設置、平成10年3月に閉科など様々な歴史を歩みながら、現在に至ります。

同校ではこれまで、転・編入学してくる生徒やそれまでに高等学校教育を受ける機会が得られなかった方など、様々な入学動機や学習歴をもった生徒を多く受け入れ、学び直しのできる教育の場としての役割を担ってきました。また、公民館のサークル活動を校内で実施したり、生徒会を中心に通学路や最寄りの駅の清掃活動に参加するなど、生徒が地域の方々と関わりながら学び、成長する場をつくってきました。その他にも、開校以来、地域の方々の教養を培うために書道、パソコン、中国語などの講座を開講するなど、生涯学習の充実にも力を入れ、地域の学びや文化の向上に貢献してきました。

開校当時は集団就職が盛んな時代であり、働きながら高等学校で学ぶ人も多かったため、地元だけでなく、遠く離れた地域からの就職する人々を受け入れる役割も果たしてきました。しかしながら、近年、時代の移り変わりとともに、働きながら学ぶ人は減少しており、半世紀に渡

り地元根付き、歩みを進めてきた紀の川高等学校は閉校を迎えることになりました。この学び舎で育った卒業生の皆さんには、言葉では言い表せない寂しさが、また、地域の方々には、深い愛惜の思いがあろうことかと存じます。しかし、同校の校歌に「ああ紀の川高校 とこしなえに とこしなえに 我が紀の川高校」とあるように、地域の皆さんに信頼され築いてきた歴史と伝統は、卒業生や地域の皆さんの心の中にいつまでも「とこしなえに」引き継がれ、刻まれていくことでしょう。

社会の変化や生徒の多様化が一層進む中、より多様なニーズに対応した高等学校づくりが求められています。県では、今後も紀の川高等学校のよき伝統や積み重ねてきた取組を引き継ぎ、本県の次世代を担う子供たちの資質や能力を伸ばすための施策に生かすよう一層全力を傾けてまいります。

結びに、地域の皆様の長年にわたる温かい御支援と御協力、歴代の校長先生をはじめとする教職員各位の献身的な御指導、並びにPTA教育振興会、同窓会、そして、関係者の皆様の御尽力に、心から敬意と感謝を申し上げます。



和歌山県立紀の川高等学校 閉校にあたって

和歌山県教育委員会教育長
宮下 和己

和歌山県立紀の川高等学校は、勤労青少年に勉学の機会を与えるという趣旨のもと、橋本、伊都、笠田3高等学校の定時制課程を統合し、県内3番目の独立定時制高等学校として、昭和42年に設立されました。生徒たちの多くは地域の企業で働く若者たちでしたが、他府県から親元を離れて就職してきた者も多く、働きながら学べる場として、同校は大きな希望になりました。また、翌年には通信制課程普通科と近隣の看護学校の生徒が学ぶ場として衛生看護科を設置しました。時代の移り変わりとともに衛生看護科は、平成10年3月に閉科され、通信制課程普通科として、レポート学習やスクーリングを通じて生徒に寄り添った指導を続けてまいりました。

近年、同校へ通う生徒たちの学習歴や入学動機は多様化し、勤労青少年のみならず、全日制高等学校からの転編入生や不登校を経験した生徒、高等学校教育を受ける機会を得られなかった方など、様々な背景をもつようになっていきます。こうした生徒一人一人に対応するため、平成25年度には特別支援教育の県研究指定校となり、専門家や外部機関等と連携して充実した支援体制を整えました。

このような教育活動を通じて、これまでに3,100名を超える卒業生が紀の川高等学校を巣立ち、社会の様々な分野で活躍されています。この間、社会は大きく変化しましたが、学校が

生徒一人一人に向き合い、それぞれに合った教育を提供するという姿勢は一貫されており、その結果、多様な個性をもつ生徒が、それぞれのペースで、生き生きと自らの学びに取り組んできました。このような生徒を中心に据えた指導を続けてこられた歴代校長をはじめとする教職員の熱意、さらには同校の教育を支えてこられたPTA教育振興会、同窓会など関係各位の御尽力に深甚なる敬意を表します。

紀の川高等学校のよき伝統を引き継ぎ、生徒一人一人の夢を実現する、従来の全日制・定時制・通信制高校の概念にとらわれない、新しいタイプの学校として、伊都中央高等学校が、平成27年4月に開校しました。県教育委員会といたしましては、紀の川高等学校が積み重ねてきた成果を、県内の定時制通信制の拠点校である伊都中央高等学校にしっかりと引き継ぎ、多様な学習ニーズに合わせた教育内容を提供するとともに、未来を担う人材を育成してまいります。今後とも、多くの方々の御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、開校以来、半世紀の長きにわたり、紀の川高等学校を支え、生徒を慈しみ育てていただきました地域の方々をはじめ、同校にゆかりのあるすべての方々から感謝を申し上げます。御挨拶といたします。



県立紀の川高等学校閉校によせて

かつらぎ町長
井本 泰造

県立紀の川高等学校が、高度成長期の真っ只中である昭和42年4月、県立橋本高等学校、伊都高等学校、笠田高等学校の定時制課程を統合し、定時制・通信制の独立校として、伊都地方唯一の定時制高等学校として開校されたことは、当時の時代背景から中学校を卒業後、全日制高等学校に入学することが困難な方々にとって、大きな希望となったことは申し上げるまでもありません。

以来51年間、定時制・通信制高等学校として多くの人材を育成・輩出し、教育の振興に大きな貢献を果たしていただきました。卒業生の皆さまは、学校で学んだことを社会で実践され、かつらぎ町だけではなくそれぞれの地域の発展や、各方面での活動など郷土のためにご尽力をいただきました。

また、卒業後故郷を離れて就職された皆さまもたくさん居られ、紀の川高等学校の卒業生としての誇りを大切にされ、それぞれの分野でご活躍されたことはご承知のとおりであります。

昼間仕事を終えてから夜間に勉強を続けられたことは、大変な努力と忍耐が必要であったことと、改めて皆様方に対し心から敬意を表します。

最近では、入学される理由も以前とは少し変化してきたようではありますが、当地域にとっては、設立時と変わることのない唯一の定時制・通信制の高等学校として、かけがえのない

大切な学校であります。

開校以来多くの関係者のご尽力により、定時制・通信制の高等学校として、たくさんの功績を残していただきました。私としては、従来通りこれからもかつらぎ町での存続をお願いしたいところでありましたが、近年当地方でも少子化の影響が大きく、加えて進路の多様化により入学される方が減少し、平成30年3月をもって51年間の長い歴史に幕を閉じ、定時制・通信制の高等学校としての役目を終えるとのことであり、このことは卒業生の方々だけではなく、かつらぎ町にとっても大変さびしく、時代の移り変わりを感じざるを得ません。

ひとつの学校がなくなるということは、卒業された皆様方のみならず、教育に携わってくださった方々の寂しさはひとしおであると存じます。しかし、紀の川高等学校の歴史と伝統は消え去ることなく、新しく開校した伊都中央高等学校に引き継がれることと思います。

長らくの間、多くの若者に希望を与えていただいたこと、たくさんの思い出を残していただいたこと、私たちの地域を支えていただいたことに対し、かつらぎ町民を代表して心から感謝を申し上げますとともに、これからも当校を巢立っていかれた卒業生の皆様方及び関係者各位の末永いご健勝・ご多幸をご祈念申し上げ、閉校にあたってのご挨拶とさせていただきます。